

日本醫學史雜誌

第 9 卷 第 2 号

昭和 33 年 7 月 15 日發行

原 著

- カスバル流外科の流祖について……………大鳥 蘭三郎…(31)
蘭方薬ミリンカ考……………佐藤 文比古…(35)
江戸時代精神病の治療に用いられた吐方……………山田 照胤…(38)

史 料

- 錦小路家文書 (3) ……………山崎 佐…(52)
室町末期以降海外交通資料解説……………中村 拓…(63)

研究余録

- 元禄九年の官医名簿……………石原 明…(48)

雜 報

- 医学古典集予告……………(34)
人事消息……………(51)
新刊紹介……………(59)
編集後記……………(61)
日本医史学会小誌 (華・英文) ……………(62)

通 卷 第 1352 号

日 本 医 史 学 会

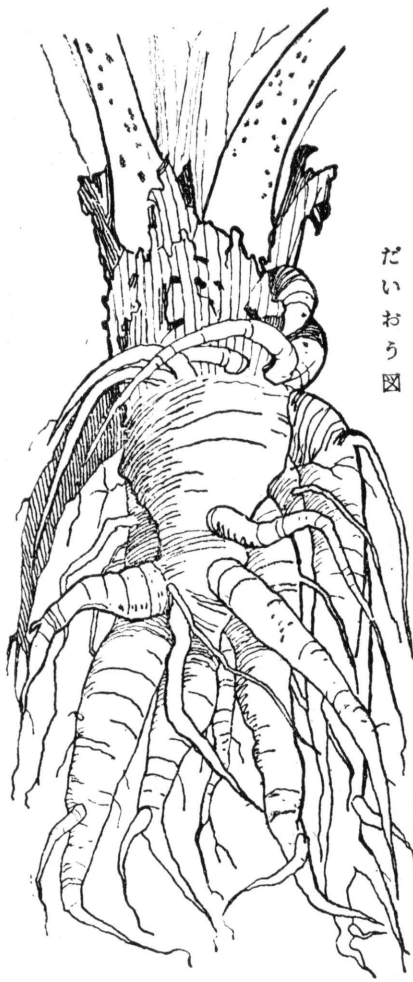
振替口座 東京 15250 番

漢方処方 の 長所を集めた

本剤は「傷寒論」中の「小承気湯」と「金匱要略」中の「厚朴三物湯」及び「麻子仁丸」の薬方の長所を集めて創られた製剤で、4錠中に次の処方によって抽出された有効エキスを0.3g含有しています

大黄 1.0g 杏仁 0.1g 芍薬 0.1g
枳実 0.1g 栝椰子 0.2g 和厚朴 0.2g

効能…常習性便秘、急性・慢性胃腸炎及びその後の便秘、妊娠・産褥・月経時の便秘、心臓・腎臓疾患時の便秘、虚弱者及び老人・婦人の便秘、坐業・異常摂生による便秘、神経質等に伴う便秘。



だ
い
お
う
図

★漢方新緩下剤

オートル 糖衣錠

(包装) 50錠入 > びん <

ウロコ印



武田薬品

大阪市道修町

武田薬品工業株式会社

(東京・札幌・福岡) (04)

カスバル流外科の流祖について

大 鳥 蘭 三 郎

カスバル流外科と呼ばれるものが国で慶安の初年（一六五〇）ごろに行なわれていたことは「蘭学事始」にも記されているところで、その流祖に当る人についてはことに関場不二彦博士が度々考証を試みられ、また昭和九年には日本医史学会の特別講演としてその日本渡来および滞在年度について考証されている。

私は年来いわゆる「蘭館日誌」を通読しているが、関場博士のいわれたところに二三の不審があるのでそれ等をここで申上げてみよう。

関場博士によればカスバル流外科をわが国に伝えたのはカスバル・スハムベルヘン Caspar Schambergen という名の人であるとされている。その拠り所とされているのはオスカー・ナホッド Oskar Nachod が一八九七年に著わした「第十七世紀におけるオランダ東印度商会と日本の関係」Die Beziehungen der Niederländischen Compagnie zu Japan in 17 Jahrhundert であるとされ、ナホッドはこのことをヴァレンタインが一七二四年から一七二六年にかけて著わした「旧および新東イット誌」にのせている「出島誌」から引用したと書いてある。

ところが私がこのことを最初に調べた村上直次郎博士訳の「長崎オランダ商館の日記」第二輯によるとその二八二頁に医師カスベル・スハムベルヘルとあり索引では Casper Schamberger と出している。すなわちこれまでカスバル・スハムベルゲン Caspar Schambergen といわれていたところと少しちがう。不審に思ったが幸い、東大史料編纂所にオランダハーグの文書館にある「オランダ商館日誌」の原本から撮ったマイクロフィルムがあるのを思い出して読んだところ次のようなことが判明した。

商館長アントニオ・ファン・ブロウクホルストの日記の一六五〇年一月二十六日の項に、明らかに Casper Schembuiger とあるのが見られる。すなわち、カスペル・スハムブルヘルと読める。これは私にとつて知り得た新しい事柄である。私が読み得たものは原本そのものではないが、原本と最も近いマイクロフィルムによつたものであり、そのマイクロフィルムにあるところははつきりとカスペル・スハムブルヘルと読むことができたのであるからカスペル・スハムベルゲンは誤りであると信ずる。

第二に申上げたいのはカスペル・スハムブルヘルの渡来した年についてである。関場博士は明治三二年「中外医事新報」第四五一号と昭和八年発行の「西医学東漸史話」上巻のなかで、カスペル・スハムブルヘンの来朝は、慶安二年（一六四九）九月十九日で、十一月二十五日に江戸に向い、十二月三十一日に江戸に着き、約十一カ月間江戸に滞在、医術を教え翌年十一月十四日に出島に帰つたとされている。その説の出処は前に掲げたナホッドの著書である。

ところが、同博士は昭和九年四月に東京で開かれた日本医史学会の席上で特別講演『和蘭流外科スハンベルヘン事蹟』を行われ、そのなかで前に説かれたところを訂正して、カスペル・スハムブルヘルは寛永二十年（一六四三）二月に韃靼行を名として北海にある探検を目的とした蘭船二艘の一「ブレスケンス」号の医師となり、九月十日に南部山田浦に上陸以来、日本に滞在満七年三カ月におよび、慶安三年（一六五〇）十二月十七日に長崎を去つて帰国したことを講演の要旨とされた。

博士は前説をもつてしては、ことに日本滞在が僅か八カ月間の短日月という事実ではすべて協力を欠き、疑わしいと考察され、百方考証を重ねた末、馬場貞由が重訳した「東北韃靼諸国図誌野作雜記訳説」六巻を出典として、前に説かれたところを右に述べたように改められたのである。博士が馬場貞由の訳本にあるところを基とされた主要箇所は同書に大要次のごとくある記事である。『寛永二十年（一六四三）九月十日にオランダ船ブレスケンス号が南部山田浦に碇泊し、船長スケエブ以下十人が上陸したところ、南部藩の保護を受けて江戸に護送された。江戸で取調べられ、オランダ人であることが判明して、そのうち六人は冬中に長崎へ送られ、次に挙げる四人だけが江戸にのこつた。』

コッファマン 長 ウイリアム・ベレフエルト William Bylevert

砲術士 ユリアン・スケエデル Julian Schaedel

外科医 カスパル・スハムベルヘン C. Schambergen

給仕(あるいは助手) ヤン・スミット Jan Smidt (Smith)

そのうちスケエデルによつて砲術または大砲などの操縦法、スハムベルヘンによつて蘭方の医術が、カスパル流外科として我邦人の希望者に教授せられ、門弟等は杜撰ながらもその療法を受け伝えた。』

「蘭館日誌」によればプレスケン号の南部領碇泊に関する記事は一八四三年九月十日の項にはじめて見えている。その記事は当時の商館長であつたヤン・ファン・エルセラックが書いたもので、長崎の出島オランダ商館において江戸からの便りとして認めている。そしてその日にエルセルラックはプレスケン号船長スハープに宛てて手紙を出している。エルセラックはその年の十一月八日に長崎を出発、江戸参府に向つた。十二月一日に江戸に着き、十二月三日にプレスケン号に関する審問を幕府の役人から受けている。同月五日にプレスケン号船長スハープ以下の人々と会い、その後それ等の人々が釈放されるにいたつたことを細かに述べ、十二月二十四日にエルセラックはプレスケン号の人々と共に江戸を出発し、翌年一月二十四日に長崎に帰着している。そうして江戸にオランダ人を残してきたことは少しも記されておらず、長崎に帰つてから長崎奉行に差出した南部からきたオランダ人十名の氏名書には船長スハープ・バイレフエルト等は記されているが、スハムベルヘンの名は何等記されていない。

右にあるようなところから、私は関場博士がいわれた『カスパル・スハムベルヘンは寛永二十年に南部山田浦に碇泊したプレスケン号に乗組み、九月十日に日本上陸以来日本に滞在満七年三カ月におよぶ』とのことをすべて否定する。

それならばカスベル・スハムブルヘルが日本に来た時はいつかというところそれは一六四九年九月十九日で、商館長はアントニオ・ファン・ブロウクホルストといつた。カスベル・スハムブルヘルは商館長と共に十二月二十五日長崎を出発、江戸に向い、十二月三十一日に江戸に着いた。そののち商務員ウイレルム・バイレフエルト、砲手ユリアン・スヘーデル

伍長ヤン・スミットと共に江戸に居残り、約十一カ月間江戸に滞在し、その翌年十一月十四日に帰島に帰つたこと等を私は「蘭館日誌」の記載から主張したい。なお奇妙なことは、関場博士がいわれた一六四三年に日本に来て江戸に残つたスハムベルヘルと生活を共にした人の名が右に記したところとまつたく同一なことである。思うにこういった誤りは関場博士が引用された文献の信依性を疑わしめるものではなからうか。(慶大医学部講師)

本会第六〇回総会の記念事業として刊行を計画した「医学古典集」は既報の通り、第一冊の望月三英著「勸医抄」を四月に出版したが、第二冊の長与専斎著「松香私志」は組版と校正に意外の時間を費やし遅延した。目下、最終の校正を行っているので、八月末には公刊できる予定である。

第三冊の三浦梅園著「造物余譚」と中井履軒著「越俎弄筆」は幸い両書とも自筆稿本を底本とすることを得たので、凸版と写真版で原型通りに影印することにし、これまた製版に着手した。刊行は九月末の予定。

第四冊の「杉田玄白未刊隨筆集」は、戦後伝を失つた遺稿中の歌集が最近再出現したので、収載するものは六種となり、脱稿した。

第五冊の緒方洪庵著「人身究理小解」と岡研海著「生機論」も原稿はほぼ脱稿に近いので、五冊まで今年中に出版できる見込みで刊行順序も右の通りである。第六冊以下は目下の見込はたないで、刊行順序は未定である。

なお、「医学古典集」は本会では編集事務だけで、出版発売は東京都文京区駒込片町三二医歯薬出版株式会社(振替口座東京一三八一六番)で行っている。希望の方は直接出版元に御連絡いただきたい。特殊出版物ではあるが、貴重なしかも根本史料を提供することであるから、同好の方々におすすめていただきたい。

蘭方薬 ミリンカ考

佐藤文比古

ミリンカは和蘭医方輸入の初期から文政年代頃まで約百五十年間駆虫剤として使用された品であつたが、現在ではまったく忘れ去られている。ミリンカの最初の文献は西玄圃の著として伝わる延宝二年（一六七四）の書入ある「和蘭陀口和」で、その中の阿蘭渡妙薬之覚にスウトホウ（甘草）・ピリリ（乾胆）・ヘイサラハサラ（鉾苔）と共にミリンカとだけ記載されたもので、形状効能等が無いので、只当時輸入されたであろうことを知るのみである。丹波頼理著の「本草薬名備考」（延宝六年一六七八）は和蘭医方薬品を記した最初の刊本であるが、その中に『ミリンカ、南蛮物也。能ク虫ヲ下ス』とあり、また延享三年著、東伯亢の「奇薬輯録」にも『美里牟加、南蛮ニ産ス、制虫ニ効有リ』と記している。その駆虫薬であることが知られる。同年代頃の著と思われる写本「和蘭陀外科書」中の蘭日対訳語彙に『一、アフセンテ インチン【菌陳】、一、ミリンカ 同草』とあるのが、ミリンカはアフセンテ Absinth で有ることが知られる。アフセンテは和蘭語 *Alsen, Artemisia absinthium* で「ドネウス和蘭本草和解」に『阿兒斯陝、按ニ大東唐山ニテ用フル所ノ菌陳蒿ナルベシ』とされたものである。同書にこの草を用いれば腸内の虫を遂下しあるいは吐く、ただに服用するのみでなく外から伝けても虫を治す、とあるので前記の文献ともよく符合する。野呂元丈が寛保三年（一七四三）に著した「和蘭陀本草和解」には

セーメンセトワリーエ、ラテン名、薬店ノ名、ミリンカ、

ラルムコロイト、ヲランダ名、ラルムハ虫ヲ云フ、コロイトハ薬ヲ云、専ラ虫ヲ殺ス故名ト云

一小兒ノ虫生テ腹痛スルニ大黃ト当分細末シ蜂蜜ニ煉合セ用ユレハ虫ヲ下シテヨシ、

とあるが拉丁語のセーメンセトワリーエは *Semen Zedoaliae*, で *Semen Santonici* と同義語でシナ花 *Flores chinae* のこと、和蘭語 *Worm Kruid* でこれには三種あつて一は *Gemeene Worm Kruid* (*Tanacetum Vulgare*) 二は *Wormdoodende Kruid* (*Spigelia Anthelmie*) 次が *Wormzaad*, *Zeeverzaad*, *Worm Kruid* (*Artemisia chinae*) となつてゐるが、ここではもちろん後者を指すので、ミリンカはシナ花の俗名であることが知られる。前項のアフセンテを広くヨモギ属の名とすると、これもシナ花となるが、なぜにシナ花センメンシナをミリンカというたか不明である。シナ花は当時種子と誤り伝えられたもので、母植物は遠くロシア西南部に産するので欧州にもよく知られていないので学者間には *Artemisia* の植物属名で呼ばれていたのであろう。当時わが国に知られたヨモギ属の駆虫薬としては阿赫羅捏と阿兒斯陝の二種があつて、前者は *averoone*, *averoon*, *averuyt*, と称された。主として *Artemisia abrotanum*, の花蕾を陰乾したものであるが、別種があつて参脱里那 (*Santonina*) および設以波列斯箇綠伊脱 (*Zeevers Kruid*) といつたこのことである (ドドネウス和蘭本草和解)。後者は *Alsem*, *absinthium*, でこれにも別の種類があつて参脱尼吉由模 (*Santonium*) もその一種のことである。さすれば阿兒斯陝にはアフセンテとシナ花を含むことになり、同一物となるが詳細は不明である。以上十八世紀前半迄の文献はあまり知られていない。それ以後になると汎く知られてゐるので度々考証されているが、正鵠を得てゐるものが無いようである。

1. 用藥須知 松岡玄達著 宝曆九年(一七五九)ミリンカ 草の根なり、江戸葉舖にあり。和の胡黄連に似たり。味苦し一味糊丸にして小兒虫症に用ふ。此物偽物多し、扱ひ用ふべし。

2. 紅毛談 後藤梨春著 明和二年(一七六五)ミリンカ 草の根なり、和の胡黄連に似たり。味苦し、一味糊丸にして用ふ。

3. 藥品手引草 加地井高茂著 安永七年(一七七八)ミリンカ ヲランダの草の根、偽物ををし。

以上いずれもミリンカを草の根としてゐるのは前記の諸文献とは著しく相異してゐる。胡黄連に似た蘭方の駆虫薬としては *Duizendgulden Kruid*, *Herba Centaurii minoris*, がある。「蘭療藥解」(一八〇六)に『*Santorie* 胡黄連主効驗

液ヲ駆シ虫動ヲ伏シ多用スレバ湧吐ス』とあるので Santorie すなわち Herba Centaurii を胡黃連としたことが知られるのでこれ等の三書は共に同草を指すものである。さらに年代が下つて十九世紀となると、

1. 和蘭制劑 千野良俗著 文化二年(一八〇五) ミリンカは蚕葉なり、無ければ大蓼をもつてこれに代ふ。

2. 本草綱目啓蒙 小野蘭山著 文化二年(一八〇五) 古渡りの蛇床子は形小にして毛刺なく堅に細稜あり。集解に説くところの如し。形ミリンカに似て微大にして長みあり。

3. 手板発蒙 大坂屋四郎兵衛著 文政六年(一八二三) ミリンカ 芹類の実なるべし毒あり。

等と記しているがこれ以後は記載を見ない。以上の三書はいずれも小果実としているが、これらはシナ花を小果と見誤つたものであらう。

シナ花は和蘭でも十七世紀後半から使用された薬で、本邦への輸出も充分にできなかったと思われる。十八世紀後半においてはその等のためかあるいは戦争その他何等かの事情で輸入が止まり、その代用品として他の薬品がわが国に輸送されたので、上記のごとく草根としたものである。

また偽物の多いのも品薄を考えさせられる。化政時代になると各種の翻訳書がいずれも撰綿施那を用いたので、後には俗名のミリンカは姿を没してしまふことになつたものである。(明治薬大教授)

江戸時代精神病の治療に用いられた吐方

(その二 喜多村良宅の治療について)

山 田 照 胤

緒 言

吐方とは、吐剤を服ませて嘔吐を起させ、病毒を排泄させるという意味の治療法であつて、傷寒論にみられ、中国古代医術の汗、吐、下の三法の一つであつた。

吐方がわが国で行われたのは江戸時代中期乃至後期で、所謂古方派の勃興した時期、すなわち実証医学の起つた頃であつて、吐剤としては、瓜蒂、常山、巴豆等が用いられた。

吐方を行つた人々のうち先ず挙げなければならないのは奥村良竹（一六八九年—一七六一年）であつて、瓜蒂を用いて盛にこの方を行い、その門下には数多の人材が集つた。特に山脇東門・永富独嘯庵・荻野台州・田中必大・丹羽子牙等是有名であり、永富独嘯庵には「吐方考」（一七六三年）の著があり、荻野台州には「吐方篇」（一七六四年）の著書がある。また惠美三白もこれを伝え聞いて自ら吐方を行い遂に一家を成し、さらにその子大笑に伝えた。さらにまたこれらの人たちは別に中神琴溪も独自の工夫で瓜蒂を用いて吐方を行い大いに奇効を挙げた。

吐方は種々な疾患に用いられたが、屢々精神病の治療に応用されて、効果があつたことである。殊に上記の人々のうち中神琴溪は精神病について数多くの治療例の記録を残している。また琴溪の門人喜多村良宅もまた瓜蒂を用いて吐方を行つて精神病の治療を行い、「吐方論」を著した。

喜多村良宅については果していかなる人であつたか余り明かでないが、「吐方論」によれば薩摩藩の侍医で江戸に住んでいたようである。また「吐方論」は、富士川氏^③によれば、土田翼卿の「癲癇狂経験篇」などと共に日本初の精神病書の一つであるといわれている。著者はすでに中神琴溪の精神病の治療について報告したが^④、今回は琴溪の門人喜多村良宅の治療について、著書「吐方論」によつて考察した結果を報告する。

精神病総論

「吐方論」の前半は吐方に関する概説的事項が記載されており、後半において『狂癇』として精神病について述べられている。

一 精神病の分類

- (1) 狂（または狂癇）——内因性精神病をさしているようである。
- (2) 癇——神経症あるいは反応性精神病をさしているようである。

良宅は以上のごとく精神病を大別しているが屢々混同している場合もあつて、和田東郭^⑤や中神琴溪の分類程明確ではない。

二 精神病の原因

- (1) 遺伝的素因を『父子血統相伝によるもの』と述べ、
- (2) 幼時体験として『幼時大に驚き物胸中に凝り』と述べ、
- (3) 心因として『成人後、心身を過度に勞し、また驚愕心配事のため抑鬱憂愁して成る』と述べており、この点については殊に重視していたようである。

三 精神病の病因論

大概の場合は膠痰（粘稠な水分）や鬱火が心胸に伏在するために起るといふ。また吐方は病が胃および胸部より上に在る場合に行うので、従つて狂癇にも用いられるのであるという。

四 狂癇（精神病）治療概説

(1) 吐方の適応——『脈沈伏を易とし、脈浮数を難とす、沈伏はその毒浅く、浮数はその毒深し』と述べまた

(2) 吐方を速かに行うべき場合

a 症状烈しき初発時

b 慢性経過中の烈しい再燃

(3) 先ず薬物治療を行つて身体を吐方に耐えられるように回復させてから吐方を行うべき場合

a 元来の固疾がある上に心因反応を起した場合

b 身神過労の場合

c 難産の後身神の不調和の時期

(3) 吐方の禁忌

『狂癇、搐搦の症あるものは吐す勿れ、先ず搐搦を治して後之を吐せ、然らざれば必ず直視上鼠して死す』とある。

これは搐搦のあるような場合には器質的变化のあることが多いので、その器質的变化を先ず治療してから吐方を行つて精神症状の治療を行わなければならない。という意味であろう。

五 狂癇の症状

精神病の症状について観察は線密であつて、現今の精神医学と対比して仲々興味がある観察を行つている。然し、これらの症状は単に羅列的に記載されているのみであつて、未だ系統的な体系づけはなされていない。

(A) 身体症状

元来西洋医学が渡来する以前の医学（漢方）においては精神症状と身体症状は別個生ずるものではなく必ず相互に関連があると考えられていたので、精神病の身体症状も軽視できないものとして、種々の記載があるのである。以下この点について記載を簡単に述べる。

a 脈は沈伏 沈洪 浮数などである。

b 眼が青く 唇燥き 胸腹の動悸が亢進する。

c 病久しく続いても疲れず、寒熱往来、盗汗消瘦なども挙げている。

(B) 精神症状、私見により次のごとくまとめみた。

(1) 患者が表出する症状

a 空笑、独語、大声でわめく、不眠、夢交、緘黙、貪食あるいは不食、易怒、泣き悲しむ、人に会うことをいやがる。その他

b 『臥さんと欲して臥す能はず、行かんと欲して行く能はず』と述べている不安状態

c 『高き所へ登りあるいは奔走す』とある興奮状態などの記載がある

(2) 患者が語る内容の異常（異状体験）

(a) 妄想と考えられるもの。

a 『自ら智者となえ、自ら高貴となえる』

b 『門窓をおとなう声に驚き、あるいは風雨去来の響きを怖る』と述べ

(b) 幻覚と考えられるもの。

a まだ見たこともない山や川や神社仏閣の形状を、あたかも自分が作ってきたように語る

b あるいは家の中深く閉じこもつていながら外のできごとを知る

c 耳鳴つて泉音、鐘音を聞き、あるいは眼乱れて花が飛び、鬼が往来するを見る。などとあるのはそれぞれ幻覚によるものであろう

(c) 離人体験と考えられるもの

『日常の起居動作や人との応対などまったく正常であるが、次のごときことを語る』として、

a 胸の中に別の人間がいる、といったり、

b 私は前日の私ではない、といったり、

c 私は以前に死んでしまったのだ、それなのになぜこのように話したり、話を聞いたりできるのである。といったり、

d 私は以前心臓のあるところへ置いてきてしまった、などということががあると記載している。

(3) 癲癇の精神運動発作あるいは夢中遊行のごときものと考えられる記載。

a 毎月五〜六日連睡してさめず、(後述の症例(5)参照)

b 毎夜にわかには起きて舞踏し、あるいは蹴球し、あるいは睡眠中によく歌を唱い、翌日は少しも知らない。等を挙げている。

当時世間一般人の精神病に対する考え方が何のようであつたかは、次に挙げる記載により明かである。すなわち良宅はこの書の中で『世人知らざればあるいは狐憑きのためとなし、あるいは神の崇りとなし、医者もまたそれらの俗説を改めようともせず、治療もできない』と述べているのである。従つて精神病患者ができると必ず家族は神仏に祈つたり、巫子や僧侶に祈禱を頼んだりしたようである。

精神病(狂癇)の症例

次に述べる各症例は、種々な医療によつても少しも回復せず、数カ月乃至数年におよんだものを良宅が吐方によつて回復せしめ得た例である。

(1) 狂癇正証(精神分裂病と考えられる例) 金杉町、甚兵衛の妻は、多弁、言語滅裂、日夜興奮状態を呈して走り廻つた。

この患者には二聖散(註)を用いて吐方を一回行つただけで症状は相当な回復をみた。さらに内服薬(註)を与えた。そして熟睡より覚めた時には意識清明となつていて、全身の関節が痛いことに気がついた。然るに偶々芝町に大火事があつて、患者の

家も類焼したためしばらく治療を中断したところ、再び前記の症状が再焼したので、また吐方を行い、内服薬(註)で調理して間もなく完全に寛解した。

以上の例はあるいは躁病かとも考えられるが、その区別は以上の記載では明かにできないので、発病の頻度から考えて精神分裂病ではないかと推定したものである。

(2) 狂癩雜証(精神分裂病と考えられる例) 内藤侯の女、十七才、

発狂したため祈禱や吐方を行ったが四年間治らなかつた。(この吐方は不適切な方法であつたといつてゐる) すなわち日夜眠らず、刺戟的で怒り易く、怒ると暴言をはき、床を叩いたり、器物を投げたりし、また始終走り廻つていて、どこへでも行つてしまつた。身体は肥満し強健であつて、便秘してゐたので、数日の間下剤(註)(大黃湯)を用いた後二聖散を与えたが、分量を一匁より四匁まで漸次増量したが、膠痰をなかなか吐出しないので、蟾酥を酒でのませたり、二聖散と商陸汁を兼用して連用した結果、漸く七・八日目頃に膠痰(粘稠な液体)を益に一杯吐出し、その後熟睡すること一昼夜におよんだ。それ以来僅かに回復したので、さらに吐方を続行し、一年後には病氣は十中七・八は除かれた。さらにその後四・五カ月薬を用いず状態を観察してゐるうち前記の症状は悉く寛解した。

(3) 狂疾の起り初め(神経症のごとき症状を呈した例であるが、あるいは精神分裂病の極く初期であつたかも知れない。然しこの記載によるだけでは果していずれであるかを明かにすることはできない)

横山町村田屋徳兵衛は脚、腰が痛んで屈伸できない。また悪寒があつたり微熱があつたりする。食欲はなく、始終痰を咯出している。夜は眠れず、いろいろな考えが次々と浮んできて、遂には朝になつてしまふ。もし眠れば直ぐ亡妻の夢をみる。また敏感になつて、ことごとくに驚き易くなつた。また言葉のいい間違が多い。というような状態になつた。

これには内服薬で五日後に腰部の痛みがとれ、食欲が出たので、二聖散を与えて僅かに吐かせたところ、唯一回で前記の症状はまったく消失した。その後調理すること数十日で身神共にまったく健康になつた。

(4) 狂癩久瘡(欠陥性分裂病と考えられる例)

日本橋四日市の雅右衛門の妹は癡狂後二〇年を経て、種々な医方、妙薬も寸効なく、万策尽きてこのところ数年間は放置してあつた。年令三七・八才、身体は瘦せ、皮膚は垢だらけで、手に丸い物を持ち、語言は不明瞭で意が通じない。これは身体も衰弱しており、病期も経過し過ぎているのです。すでに治療の時期を失したと思つたが、いまだに眼光が鋭いこのみを頼みにして、瓜蒂散(註6)で僅かに吐し、薬物を兼用したところ僅かながら回復の徴候がみえたので吐剤を漸増し約四年の間に春秋ごとに吐方を百回余り行い、毎回粘稠な液体二升許りを吐出せしめた。(その量が余り多いので家人が驚く程であつた) その結果症状は非常に改善され、五年を経てままったく再燃しなかつた。

(5) 狂癩連睡(癲病の精神運動発作のごとき症状)

妙円寺の童僧は毎月七・八日の間連続睡眠に陥つて覚醒しなくなり、而かもその間中、大声でしゃべるが、目が覚めてからは何も覚えていない。また飲食、起居動作は平常と何ら、変らなかつた。これを癩疾と診断し、甘草瀉心湯(註6)を与え、且時折吐方を行い、治療回数五・六回で全治した。

(6) 狂癩勞疾に似た者(精神分裂病と考えられる例)

赤阪町の近江屋某の妹は、屢々家に難事が起つた後狂を発し、黙々として語らず、一室に引き込み、人に会うことを嫌い、泣いたり自殺を企画したり、また連日食事を摂らないかと思つたと常人の何倍も食べたりする。また人が自分を捕えにくるかなどという妄想をいだいていた。このような状態が一年余り続き医療も無効であつた。患者は年若く、身体は瘦せ、顔色は黄色く、眼に涙を溜めており、話しかけても応答しない。これに瓜蒂散若干を与えたところ膠痰四・五合を吐出した。さらに吐剤を増量し、同時に三黄加石膏湯を兼用し、二年間に吐方を百回余り行つた。その結果これらの症状は完全に寛解した。

(7) 狂癩狐憑きに似た者(反応性精神病のごときものと考えられる例)

鬼や狐が人に憑くという説が昔からあるが、それは信ずるに足らない、余の見たところでは多く癩疾である。と前置して次のごとき例を挙げてゐる。

金杉町美濃屋文七の妻は、ある日の夕方王子の稲荷へ行つた歸りに、意識が混濁して、駕籠に乗つて帰宅したが、歌を唱つたり、空笑したり、言語は錯乱し、また他人の氣持をいい当てようとしたりした。また右足が痛いといひそれは山の中を歩いてきたからだなどといつて、まったく急性の錯乱状態を呈したのであつた。家人は狐が憑いたと思つて祈禱をしたり、甘松香を焚いて薰したりしたが、精神症状は益々烈しくなつた。これを痼と診断し、足痛はもともと血液の鬱滞があつたためであると考え、藥物治療^(註)を行つて夜間少しは眠るようになったので、吐方を行つたところ、三回の治療で全治した。治療期間は一月足らずであつた。

(8) 憂愁により發狂せる者(この例は果して心因反應であるのか、あるいは精神分裂病であるかの區別は困難である)

ある金持の娘が嫁入りしたところ、夫が發狂したため憂愁の余り同じく狂を發したので、離婚して実家へ歸つてきた。そして日夜歌を唱つたり、空笑したり、泣いたり、大声を上げたり、家人のすきをみては走り廻り、また怒り易く、大声でさげんで人を近かづけなかつた。身体は痩せ顔色は悪い。これは二聖散で吐方を五日ごとに七回行つたところ、あるいは側で看病していた妹の着物が、今迄自分の知らない新しいものであることに気がつき、それ以来漸次回復して間もなく全治した。

以上の他数例の治療例がみられたが、いずれも症候の記載がさらに簡単であるため、果して現今のいかなる病氣に相当するものであるか検討することができなかつた。

結 語

前述の通り、これらの記載によれば、吐方が精神病の治療として有効なものであつたことは明かである。然しながら、これらの症例の中には、その治療経過が一年以上にもおよんでいるものもあつて、これらの症例が果して吐方によつて回復したものであるか、あるいは自然に緩解をみたものであるかの確定は困難なものもみられた。また治療効果のなかつた症例についての記載もまつたくなく、従つて吐方の適応が実際にいかなるものであるかを検討するに當つての対照群が、

ないということは誠に残念なことと考えられた。

また吐方が効を奏する際には多量の粘稠な液体を吐出して、決して食物の残渣などを吐かなかつたという点は興味ある現象であつて、この点によつて吐方は一種のショック療法であると同時に、脱水療法の意味もあるのであらうということが推定される。

なお喜多村良宅は中神琴溪の門人であるが、琴溪は屢々吐方のみで治療したのに対して、良宅は吐方と兼用に家方の薬方を自由に採用して治療を行っている。さらにまた琴溪ほどの医者でも狐惑病は狐が人に憑くためという俗説を信じていたようであるが、良宅はこの点を癩疾（精神病）であることを断じたことは彼の卓見といねなければならぬ。

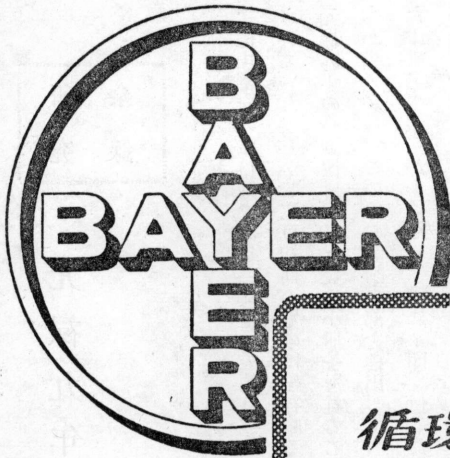
（本論文の要旨は第五九回日本医史学会総会において発表した。）

参 照 （使用された薬方の内容）

- 註1 二聖散 瓜蒂 赤小豆
- 註2 大寧心湯 大黃 茯苓 粳米 竹茹 黃連 知母 石膏
- 註3 三黃加石膏湯 大黃 黃芩 黃連 石膏
- 註4 大黃湯 大黃 當歸 乾姜 細辛 人參 甘草
- 註5 瓜蒂散 瓜蒂 赤小豆
- 註6 甘草瀉心湯 甘草 黃芩 人參 乾姜 黃連 大棗 半夏
- 註7 芍藥甘草加威靈仙大黃當歸湯（省略）

文 献

- (1) 中神琴溪 生々堂医譚 日本医史学雑誌 6, 2, (昭31年)
- (2) 中神琴溪 生々堂治驗 蕉窓雑話
- (3) 富士川游 日本医学史 山田照胤 日本東洋医学雑誌 5, 4, (昭30年)
- (4) 山田照胤 日本医史学雑誌
- (5) 和田東郭 蕉窓雑話
- (6) 山田照胤 日本東洋医学雑誌



● 健保適用品

ドイツ・バイエル製

循環系障害に… カリクレイン

冠状動脈，脳，横紋筋，皮膚及び肺の末梢血管の拡張作用のみならず，血管痙攣の抑制作用もあり，全身の血行を改善し，組織への栄養を良好にいたします。

注：10単位	5管	¥ 840
	” 50管	¥ 5,800
錠：10単位	20錠	¥ 980
	” 100錠	¥ 4,300

強力治療には…

デポ・カリクレイン

カリクレインの作用を，更に高度に且つ持続的に発揮せしめる目的でつくられた本剤は，循環系障害の強力治療に特に好適であります。

注：40単位	5管	¥ 1,800
	” 25管	¥ 7,900

輸入元 吉富製薬株式会社 大阪市東区道修町2-26
販売元 武田薬品工業株式会社 大阪市東区道修町2-27

研究
余録

元禄九年の官医名簿

石原

明

徳川幕府の職員録である「武鑑」の類は、かなり早くから発行されてきた。しかし江戸初期のものは伝存頗る稀である。近日、元禄九年の「御役付目録」なる小冊子を見ることを得たので、原本が少いから、この中の医師の部を抄出して公表することにした。姓名の誤写が少くない。横に？印を付したほか原本に忠実なることを期した。参考となれば幸いである。

御役付目録

▲惣医者 本道集

千五百石 典葉頭通仙院僧都法印 半井爐[?]庵
小川丁
千石 典葉頭延寿院僧都法印 今大路道三
道三はし
禁中付 在京五百石
山城かし 江戸宅 三雲施薬院僧都法印
千石 神田はし外 典真瀬養安院法印
七百石
一ツはし外 吉田意安法印
五百石 たやす 坂上池院

六百石 一ツはし外 竹田治部卿法印
六百石 阿部長徳院
四百石 四ばん丁
五百石 あたごの下 吉田盛芳院
八百俵 依田玄春法眼
道三ばし
五百俵 道三ばし
三百石 神田橋外 森雲仙法眼
三百表 知足院北 曾谷長純法眼
五百五十石 三河丁 高麗永竹法眼
五百表 一橋外 谷部道室法眼
五百表 道三ばし 太田道寿法眼
二百表 元ゑちご橋 平賀玄純法眼
三百表 するがだい 東宗雲法眼

千石 市兵衛丁 岡本玄治[?]
五百石 小川丁 須原清庵
五百石 いなりばし 那[?]須玄竹
五百俵 おなりばし 河野松庵
三百俵 御成ばし 外井上玄徹法眼
三百表 十五人 ぶち 細川桃庵
三百廿人 ぶち 下谷御かち丁 高木玄斎
三百表 廿人 ぶち 小石川やくゑん 木下道門
三百表 元せいくわんじ 井関正伯
三百表 銀丁六丁メ 平井省庵
三百表 あたご下 土岐格庵
三百表 北八丁 ぼり 人見正竹

二百表
するがだい久保玄貞法眼

五百表
三河丁 森專益法眼

百五十表
かきがら丁小嶋魯齋法眼

五百表
たつの口 久志本左京亮五位

五百表
三河丁 箕浦寿元法眼

四百表
するがだい 武田道安法眼

二百表十人
小川丁 奥山立庵法眼

二百表十人
筋かへ橋内橋隆庵法眼

二百表
水戸ばし外長嶋道仙法眼

二百表
かうじ丁天神須原通玄法眼

七白石
もちの木 北村安齋

三百表
元やくしとう平田道有

三百表
すかも 岸井芳庵

三百表
日本橋式部小路久志本式部

二百石
もちの木 塙道意

三百表
御弓丁 余語如庵

二百表
いらい丁 望月甫庵

二百表
大坂丁 泰[?]壽命院

二百表
御かち丁 坂実庵

三百表
両こくはま丁片山宗元

二百表十人
神田橋外 渋江松漸法眼

二百表
りうけいばし典[?]真瀬寿徳院

二百表
河村玄東

二百表
北こんや丁二丁メ小森西[?]輪

二百表
あたごの下木村春湖

二百表
上だい所丁小嶋昌怡

百表
京御やくゑん藤林道寿

二百表
上野広小路 生野松寿

二百表
小川丁 舟橋宗迪

二百表
日本橋二丁メ野間安節

二百表
小川丁 峰岸春庵

二百表
長田ばし 伴道与

二百表
北八丁ぼり極佐九ト

二百表
禁裏付 土岐芳庵

▲御外科衆集

三百石
南かち丁 吉田自庵法眼

三百表十人
柳はら 関本伯典

二百表
小川丁 佐藤慶南

二百表
新両かえ丁二丁メ杉本忠惣

二百表
さるがく丁村山自伯

三百表
本郷四丁メ栗崎道有

二百表
はま丁 服部了伯

二百表
かうじ丁天神牧野正印

百表
百俵十人ふち 栖井了琢

▲御近習医師知行所付集二有

本道 真瀬養安院法印

本道 依田玄春法眼

本道 長谷川玄通法眼
本道 森雲仙法眼

百表
本所 須田玄貞

三河丁 岡了雲

二十表五人
ごふく丁 吉益春庵

三百表
もちの木 瀬尾昌宅

二百表
かはらけ丁曾谷格元

二百表
はま丁 津軽意三

二百表
いらい丁 津軽意春

二百表
本所 天野了順

二百表
神田りうかん丁浅井休宅

二百表
赤坂四丁メ石川了順

十五人ふち
小崎三科

本道 曾谷長順法眼

本道 高麗永竹法眼

本道 谷部道室法眼
本道 太田道寿法眼

本道 平賀玄純法眼
小児 東宗雲法眼
本道 小嶋魯齋
外科 吉田自庵法眼
外科 瀬尾昌宅
外科 関本伯典
外科 杉本忠惣
針 佐田玉縁

▲小児方集

二百表
一ツばし 外 東宗雲法眼
二百表
西ノくぼ 吉田一庵

▲御針医集

二百表
神田明神下 山崎宗円
二百表
馬喰丁ばゞ 山本友仙
二百表
道三ばし 栗本杉折 サンセツ

▲御目医師集

百五十俵
京橋南二丁目 馬嶋友庵

針 山本友仙
針 山崎宗円
齒 坂本一甫法眼
本道 武田道安法眼
本道 久保玄貞法眼
本道 森專益法眼
本道 久志本左京亮

二百表
西ノくぼ 吉田長達
二百表
はしや丁 木村養運

二百表
道三ばし 佐田玉縁
二百表
するがだい 佐田玉川
するがだい 松田寿徳

百俵十人
銀丁二丁目 笠原養古

▲御齒医師集

二百表
道三ばし 堀本一甫法眼
百俵五人 本賀徳順
西ノくぼ
百俵十人
こうし二ばん丁 元康碩庵
二百俵
道三ばし 松本養長
百俵五人 金元休庵
御弓丁

▲婦人方集

馬喰丁ばゞ 大膳大夫了益

▲御奥御番医師知行所付集ニ有

岡本玄治? 土岐格庵 津軽意三
人見正竹 坂実庵 天野了庵
泰寿命院 服部了伯 数原清庵
久志本式部 高木玄齋 望月甫庵

▲惣医子息

父靈仙 森雲長 父隆庵 橘印庵
父道仙 長嶋丈庵 父玄徹 井上疑庵 父正竹 人見元紹
父宗元 片山宗悦 父松漸 洪江長悦 父玄漸 平賀玄徳
父道庵 平田伯寿 父格庵 土岐実庵
父意春 津軽意仙 父宗雲 東宗林 父実庵 坂元益
父休庵 金本瑞仙 父魯齋 高木崔庵 父道円 木下如庵

▲御馬医師

三百俵

細谷弥二郎

三百俵

橋本権之助

はくろう丁 橋本太郎衛門

笹山弥五郎

二百俵
本所

葉山源次郎

元禄九丙子歳 五月吉日

御書物所

長谷川町

松会三四郎

三百俵

桑嶋内蔵介

二百俵

桑嶋源六郎

葉山敬衛門

二百俵
麻布一之丁

桑嶋新衛門

人事消息

山崎佐・中野操両氏に感謝状贈呈……今春四月十二日に第六〇
回日本医史学会総会を記念し、本会のため多年にわたり献身的
な尽力をされ、わが国の医史学の普及と知識の向上に功勞のあ
つた前理事長山崎佐博士と関西支部長中野操博士に、総会々
長である内山孝一理事長から感謝状と記念品を贈呈した。

緒方理事海外出張……本会理事の東大教授緒方富雄博士は国際血
液学会等の学会参加をかね、去る六月二十日空路米国に向つ
た。九月中旬まで欧米各国を廻られ、御専門の学会に出席の傍
米国のイルザ・ベース女史はじめ各国の医史学者とも連絡をと
られる予定。

金斗鐘教授来訪……韓国のソール大学の医史学教授である金斗鐘
博士は欧米出張の帰途、四月中旬に東京及び大阪、京都に立寄
り、内山理事ほか数氏と懇談、内閣文庫の朝鮮版医書等を閲覧
され、医史学の交流と連携を深められた。本会より既刊分誌
一部をソール大学医史学教室に贈呈。

清水多栄評議員死去……岡山大学々長、本会評議員清水多栄博士
は学術会議に上京中狭心症で去る一月三十日令息宅で急逝。本
会より弔電をおくつた。享年六九。

伊東彌恵治理事死去……千葉大名誉教授、本会理事伊東弥恵治博
士は、永らく静養中のところ、去る六月二七日沈下性肺炎のた
め逝去、享年六六。本会より弔辞を呈し和田正系評議員が代読
された。右御二方に謹んで弔意を表する。

錦小路家文書(三)

山崎佐

頼尚

安永 二年十二月十九日 叙正四位下三十一歳

同 六年 四月廿八日 中三年 叙従三位 三十五歳

頼理

寛政 五年 二月十九日 叙正四位下二十七歳

同 十一年 正月 五日 中五年 叙従三位 三十三歳

頼易

天保 八年十二月廿六日 叙正四位下三十五歳

天保五年十二月二十七日 任中務権少輔

天保十五年 正月十四日 叙中務少輔

天保 八年十二月廿六日 叙正四位下

到于今年 弘化 中七年

天保八・九・十・十一・十二・十三・十四・十五 弘化

為元弘化二今年ニ至テ九年也 天保十四年ニテ中五年

ニ相成候ニ付上階父ノ例ニ相叶候上階可申願ノ処

中務少輔十二月闕ニ及候ニ付十一月十二日中務少

輔申望候処其年御沙汰無之翌十五年正月十四日転

中務少輔叶冥加畏入候事

一弘化二年十一月廿三日

その三 中務少輔在官一件雜記

半紙十五枚、表紙に「弘化二年十一月、中務少輔在官一件雜記」と二行に書き、右側下に「中務少輔頼易(花押)」とある。

本文、墨付十四枚、相当に虫喰いがあるが、裏打して補修してあるので、どうにか判読ができる。

本文

頼尚

明和 九年 十月 二日 転中務大輔 典葉頭 如元

頼理

天明 八年 三月十六日 任中務権少輔

寛政 六年 六月二十日 転中務大輔

尚秀

宝曆 元年十二月廿二日 叙正四位下四十七歳

同 六年 九月 六日 中四年 叙従三位 五十二歳

行向日野家辻丹下面会中務在官ノ事内々願書入見參及内談之処願書之趣能相分り候旨當時イツカタモ難渋時節カラノ儀其段ハ至極尤ニ存候得共又家例ヲ相延シ候儀コノ辺ハ何トモ難申入兎角ニ内府公ノ思召ニ有之候事之由返答也

累世蒙

朝恩畏入存候殊ニ昨年者転任冥加相叶深畏入存候然ル処上階年限ニ相後居候儀何共恐入候得共上階者差当り 公事御用モ無之儀ニ付何卒今一兩年在官御用相勤度奉歎願候内密者小禄困窮之儀ニ付伏而御憐愍之程偏奉内願候事

十二月

右日野殿へ及内談候事

十二月四日

行向藤井家上階延引之例承合之処左之通

行福卿中三年ニテ上階ノ処中六年ニテ上階三

ケ年上階延引在官

行学卿中六年ニテ可被申望之処申上置後七ケ

年ニ及候処ニテ今一兩年ノトコロ在官

被相願候シカル処一兩年ノトコロハ不若候御返答右年限相濟候ニ付昨年上階可被致之処当春上階被致候旨也

天保六年

正下

中九年

弘化二年

上階

文政七年十二月

転中務大輔

大輔在官中二十年

前後二十二年在官

弘化二年十二月四日

一行向佐竹甲斐守亭頼易事上階ニ相後居候ニ付上階可相願本意候得共上階後者格別公事之御用等モ先無之可相成者今暫上階相見合中務職務相勤度且官物モ有之候事故小禄困窮之儀偏御憐愍ヲ以右内願之趣被聞食之畏入可存且又只今上階ニテハ家例連綿仕候典葉頭ニ相關コノ儀モ甚歎敷何分ニモ医官之儀ハ拜任幾重トモ相願度モハヤ御寄合ニモ相近付有之儀ナントモ心配イタシ候ケ様ノ事ニヘヒロニ及内談度存居候処九月より

佐竹關東下向十一月廿九日歸京右見合居候内相

行福卿

迫り申候ニ付不容易成心配ニ有之候条前文内々

家例中三年ニテ上階可有之処中務在官ニ

相談且亦只今ヨリ医官之儀相願候而相叶之其後

付中置六年ニテ上階被致候旨家例□ハ上

上階可相願哉中務之辺ヲ以上階相延シヨキ其後

階三ヶ年延引被致候旨也

医官可相願哉兎ニ角勘考□預度可然方ニ治定イ

行学卿

タシ内談申処医官ノ儀小森方御相談モ可有之候

行福卿ノ例ニテ中六年ニテ上階被申上候

且亦先年ノ次第モ可有之候今度ハ先中務在官上

趣被申上置其後七ヶ年ニ及候処ニテ今一

階御延引御願之方可然歟之由也付而者中務ニテ

兩年之処在官被相願候然ルトコロ一兩年

上階相延々先例將亦他官ニテモ其例可有之歟之

ノ処ハ不苦候旨御返答有之候旨其後御元

由被相尋予答云近例藤井者上階余程被相延在官

服御用被仰出其年御延引翌年御元服御用

モ当年ニテ前後廿二年之在官也頼易事漸昨年中

相濟候旨右一兩年之年限相濟候ニ付昨年

務拜任昨今二ヶ年之勤仕ニ候何卒今暫在官御用

上階可相願之処当春上階被致候旨夫々返

相勤度旨申入之処左候者藤井之例書付猶又今一

答ニ有之候事

ヶ年トカ又者明年中ト歟御變心之処書付可差出

十一月四日 一行向藤井家行福卿行学卿上階家例借用頼入之処

之旨也予置存候旨厚申述猶例書并趣意書等可差

則承諾

出旨申入置合帰宅候事

十一月三日 行福

一藤井家江行向中務上階延引之例借用頼万事令

文化 元年 正月十一日 叙正四位下三十一歳

尋問之処左之通り也

同 八年 正月 五日 叙従三位 三十八歳

行学

天保 六年 八月廿三日

叙正四位下三十三歳

弘化 二年 三月 五日

叙従三位 四十三歳

右一紙ト三位自筆ニ而到来候右例ヲ書付差上候

一藤井江又及尋問御家例中三年ニテ御上階之処行

福卿者中務在官ニ付中六年ニテ上階候哉右之趣

及尋問之処返書左之通り

過刻者御書中之処今日者煤払致大取込中不捧

即答恐入候弥御安静令賀候仰任御命家例相認

差上候処段々御丁寧之御示恐入候且亡父上階

延シ候儀者中務在官ニ付而之事情被思召候得

共被入御念御尋之趣何モ承候尤祖父充行之例

ニテ中三年ニテ上階之処中務在官致度延シ六

年ニテ上階致候事ニ候間在思召可給候且亦不

存寄美酒拝領被仰付甚痛入候ケ様御心配ニ相

成候而ハ実ニ恐入候尤固辞可仕処折角之厚情

却而失敬ニ茂可相成ト令拜受依吳々不存寄拜

領物実ニ〱恐入候猶後刻可拜味ト相楽不浅
畏入存候不日参上万々御礼可申謝候先々御答

迄如此候也

二白大取込不捧即答每々御人遣気毒千万

恐入候吳々拜領物甚々恐入候大乱書廉答

可被免候也

十二月六日 行学

十一月卅日

一午刻斗行向榎田右者子中務在官上階延引申度内

願相立申度候付而者佐竹江書中ヲ以実家之事ニ

付云々内願候条榎田よりも頼申入則佐竹之頼之

書状申受榎田より之使ニ而佐竹江為持遺候事

右返書ニ云御実家様一件何も承候御参も□可

被拵候而拜面可申述ト之事也

十二月五日

一佐竹江使右者藤井家之例并頼易 在官願之年数等

後刻可申入旨申遺置候

十二月五日
一午半刻斗佐竹江行向之処陽明江出仕中之旨ニ付

被家僕予行向候旨相告候処近衛殿へ向参吳候様

被申時ニ付夫より直ニ参上桃花殿御縁組□悦し

き申上候事

頼理

陽明竹之間之奥ニテ佐竹面会兼而内願仕候中務
在官上階延引之事弥今日内願申度則藤井家之例

寬政 五年 二月十九日 叙正四位下廿四歳
同 十一年 正月 五日 叙從三位 卅三歳

書并内願書等持參候趣申入佐竹云昨日被仰候委

右例書一通并内願書一通

々篤度勘考仕候処此度者先中務在官上階延引御

累世蒙

願可然又医官之方ハ跡江相回シ候方宜存候旨医

朝恩畏入存候殊昨年者転任冥加相叶深畏入存候

博士ニ而モ侍医ニテモ是ハ此度中務之事相濟ノ

然ル処上階年限ニ相後居候儀何共恐入存候得共

上ニテ御願出し可然歟ト被申候尤云々其儀至極

上階後者差当 公事御用モ無之儀ニ付何卒今一

承伏候旨申入厚勘考之程挨拶申述事右ニ付猶更

兩年在官御用相勤度奉歎願候内密者小禄困窮之

中務在官上階相延シ申度及内願候事則願書并中

儀ニ付伏而御憐愍之程偏奉内願候事

務在官上階相延候例書等佐竹江相渡置候事

十二月五日 頼易

家例中三年ニテ上階之処

奉書四ツ折美濃紙包

行福

文化 元年 正月十一日 叙正四位下卅一歳

同 八年 正月 五日 叙從三位 卅八歳

行学

天保 六年 八月廿三日 叙正四位下卅三歳

弘化 二年 三月 五日 叙從三位 四十三歳

今一兩年之处在官仕度明年明後年等在官之旨相願

中置五年ニテ上階仕候旨申入事且藤井行学卿ハ中

尋也予答尤中務ニ付上階延引之旨返答申入事頼理

今日言上可仕由也行福卿ハ中務ニテ上階延引候故

書取無之哉御尋之節ハ此願書入御覽可申トノ事也

右両通佐竹迄差出置候処先口上ニ而可相願候共若

右兩通佐竹迄差出置候処先口上ニ而可相願候共若

候事

右相願置先退出之事佐竹事後刻可申上旨之

十二月五日

一早天佐竹江行向之処榿田へ行向留主中也

同日午剋斗

一佐竹主税頭入来

自内府公御返答

今度中務在官之事佐竹ヨリ被申上候処中務在官

之事一兩年之事ナレハ宜敷トノ御事願之趣被聞

食候旨也口上ニテ願候処何等書取無之哉御尋ニ

付内願書入御覽候処御落手御差止メ被為在候例

書モ差上候一兩年之事子細無之猶又殿下へモ申

入置候旨御沙汰之由也予畏入拜承候事

且亦中務正官拜任年月并正四位下叙日□差上候

様佐竹被申候ニ付直ニ相認相渡候可令持参旨申

入之処夫ニハ及不申可持帰トノ事也仍直ニ佐竹

江差出候事

上奉四ツ折ミノカミ包

且ハ仰ノ事ユヘ可令持参

之処夫ニハ及不申旨ニ付佐竹ノ被申候ニ
付任遣候事

頼易

天保 八年十二月廿六日 叙正四位下卅五歳

到今年中七年

為弘化元 天保十五年 正月十四日 軼中務少輔

右一通佐竹入手之事

十二月六日

一佐竹息入来昨夕之書付 内府公江差上候処至極

宜敷候旨御沙汰之旨被申伝予畏拜承事主税頭参

上可申入之処風邪ニ付此段息ヲ以申入候旨也且

昨夕主税頭参上之節酒飯等之挨拶也

十二月六日

一行向佐竹今度之儀願之通相叶深畏入候右ニ付段

々世話ニ相成候礼申入事且又此度之儀深畏入候

次第 内府公へ御礼参殿之事否相尋之処是ハ表

之御日次ニモ相記不申又諸大夫同列モ承知不仕

事故不及御参自然省中ニテモ御対面之節御直ニ

御礼被仰上可然旨内々佐竹示教也依々示教ニマ

カセ別ニ參上御礼ハ不申上佐竹ヲ以厚御礼申上候事

此度ノ義ハ内府公ノ格別ノ思召ト佐竹申居ノ事

十二月十三日

一西村來語云樫田ニテ佐竹被申居候ニハ典葉頭ノ方入魂之事是ハ彼方ヨリモ相タノマレ一向六ヶ敷外医官ノ方ハ取持可仕候旨被申居候旨に候典葉頭ノ方ハ先断ト申様ノモノノヨシ西村事樫由より噂之趣申居候事

一医博士侍医等之事者來春ニ相成候而可申願其方可然コノ両官ノ事佐竹篤度承知之事ナリ

一医博士ハ極内殿下ニテ牧ヨリ之次第アリ

一侍医ハ先年小森へ相談之处存寄モ無之旨返答之处其儘ニテ何之事モ不申上相成有之候此度ハ夫々記録ヲ見勘考話ニテ落度無之様心得願意可相立肝要之事也

(第三冊文書全部終)

參考 錦小路家歴代世系

丹波盛直 始めて錦小路を称す。天文十七年(一五四八)

正月、相模国にて旅中客死により絶家。

錦小路頼庸 中興の祖、もと小森氏(丹波氏の一族)勅命により盛直の跡を継ぎ、錦小路家を再興。

二代 尚秀

三代 頼尚

四代 頼理

五代 頼易

六代 頼徳 長州七卿落の一人。

七代 頼言 明治十七年華族に列し子爵を授けられる。

以下医業廃止。

八代 在明 先代嫡男なきたため唐橋家より入籍。

九代 頼孝 もと唐橋在正五男、明治四五年叔父先代在

明の家督を継ぎ、前名在孝を改め頼孝と称す。

当主 頼昭 昭和九年六月生。

新刊紹介

概説産科婦人科学史……本会評議員の三楽

楽院医長、佐藤美実博士の著で、「産婦人科選書」第十八集として泰西編をまとめた書である。前編において古代から一九〇〇年までの医学全体の發生のあらましを七章に分けて要約し、後編は産婦人科の専門分科史を記してある。産婦人科が医学の中でどんな地位を占め、いかなる社会的背景の下に育成されきたつたかを端的に把握できるように企画したものである。図版の少いが惜しいが、近來まれな専門分科史概説書として推挙をおしまない。同時に近い将来、日本編も公刊されることを希望する。(医学書院、昭三三・九刊、A5判一五三頁、定価千円)

志賀潔……本会会員高橋功博士の著、かつて東北の同人誌上に連載した志賀潔評伝を志賀氏自身が目をとめ、高橋氏に対して自伝形式に整理口述させた旧稿を書改めたもの、従つて内容は平易でありながら、最も忠実な史料に基いているので、高橋氏の名筆と相まつて近來の医学者伝

記の最高峯に位するものと信ずる。巻末に業績と年譜を附す。近代日本の細菌学の發達を知る好文獻であるとともに、志賀潔伝の決定版である。(法政大学出版局、昭三三・九刊、A6判二一六頁、定価三百円)

正倉院薬物を中心とする古代石薬の研究……

薬学博士・益富寿之助氏の私版。さきに大規模な科学的調査の行われた正倉院薬物のうち、鉱物部門を担当した著書が、その後さらに正倉院石薬を材料として古代のいわゆる石薬について独創的研究をまとめた書である。氏は薬学の出身ではあるがつとに鉱物学者としても令名高く、その薬用鉱物の研究は従來まつたく未開拓の分野に始めて科学のメスを加えたものとして、本書は高く評価されなければならぬ。東洋医学——とくに随唐およびわが奈良・平安の医学の薬物療法において特殊な地位を占める石薬は、今まで神仙の影響をうけた鍊丹術の産物でまつたく迷信的と連断され、内容の検討さえも行われなかつたが、益富氏の研究は必ずしも無効有害に非ず、相当根拠のある薬物療法で現代の化学療法法先驅をなす方法論に基いたものであることを

明確に指摘している。巻末に附録された石薬の現代学名との同定は独創的なもので、医学史を研究する者にとつて参考すべき資料である。東洋古代医学史研究のために基本文獻として推せんする。(非売品、B5判二二四頁、図版一〇六個、昭三三・三刊。領価は送料共一四三〇円京都鳥丸出水西入、日本鉱物趣味の会にて領布取次、ただし限定版のため売切のことあり)

明治前日本薬物学史……日本学士院が中心

となり、医学史と共に戦前から着手され、多年公刊が要望されていた本書は、このほど全二巻完結して公刊された。古代の薬物・南蛮医方の薬物・和蘭医方の薬物(以上、赤松金芳分担)、薬物需給史(清水藤太郎分担)、中国本草の渡來とその影響(岡田為人分担)、中国の薬物療法とその影響(高橋真太郎分担)の六編が二巻におさめられている。医学史の方は全巻のうち第四巻がまだ完成していないが、医薬両方の歴史をそろえて全七巻が完成した暁には、世界にその比をみない大きな業績とならう。薬物学史はわが国の薬物療法史の展望であり、複雑な外来医方の影響下に發達した千年余の沿

革を鋭い史観と豊富な史料を駆使してまとめられたので現在最高の薬物療法史の専門書であると同時に、薬物療法の思想的変遷を知るのにはまたとない文献である。長期にわたる執筆のため各編の間に統一を欠く点もあるが、かえって分担執筆者独自の考えが知られて興が深い。

(日本学術振興会、昭三三・三刊、全二冊計一〇一二頁、定価第一巻千円、第二巻九五〇円、A5判上装、丸善書店扱)

校訂・解説 勸医抄……本会六〇回総会を記念して計画された医学古典集第一期の最初の一冊として、望月三英著「勸医抄」が総会当日に発行の運びとなつた。本書は原田謙太郎博士の発見で、校訂・解説もまた同氏の労作にかかる。従来未見の隨筆で、医道入門の心得、医のあり方を示したものと、異色ある古典とされている。江戸時代中期の医界を知る有力な史料。是非一本を座右に供えられよう望んでやまない。(医歯薬出版、昭三三・四刊、A5判七八頁、四五〇円)

外科学序説……現代フランス外科学の長

格であつたルネ・ルリシ教授(一八七九

—一九五六)の「外科の哲学」を名大の木村高偉氏が原著者の許可を得て邦訳

した書。本書は医史学の専書ではないが、外科畑における医学概論、医道精神を著者の体験を通して平易に説いたもので、先人の思想や業績を随所に引用しながら筆を進めている。近代外科がフランスに負うところ、医史学の明示する事実であるが、アンブロア・パレに創始されたカルトの方法論を導入し、パスツールらの基礎的研究の上に立脚して独特の体系を築き上げた現代フランス外科の巨星は、何を求め何を究めたであろうか。本書を医学概論の出色な文献として広く紹介したい。(医歯薬出版、昭三三・四刊、A5判二五七頁、定価八百円)

紙魚のむかし語り……さきに「尾張医科学史考」の大著を公刊された本会会員吉川

芳秋氏が、三十年にわたる郷土の科学者に関する資料探索の思い出の隨筆をまとめたもの、とくに伊藤圭介伝の研究に生涯をかけた著者として、第二部のこれに関する記事は興味深い。元来、名古屋の地は本草学が栄え、これを母体として近代動植物学が発生した。限定版。(A6判二一九頁、昭三三・六刊私家版。希望者には特別頒価二五〇円、頒布申込先名古屋市東区安房町二九吉川芳秋宛)

鑑真……早大教授安藤更生著、本書は鑑真の研究者として著名の安藤教授が、多年の研究を始めて世に問うた鑑真伝の決定版である。一般教養向に書かれてはいるが、史料の批判や解説に多年の苦心が偲ばれ、とくに従来神秘視されていた漂流記の現代的解釈は傾聴に値する。惜しいことに医薬に関する史料に余りふれていないが、すぐれた原色版や豊富な写真は目を楽しませるに十分である。奈良時代の医学を研究するに不可欠の参考書である。(美術出版、昭三三・六刊、A6判二二五頁、定価三八〇円)

修訂本・中国医学史……二〇年前初版刊行

以来、唯一の中国医学史の専書として著名の陳邦賢氏の書が今回面目を一新して新刊された。新版では横組となり全面的に書換えとくに太平天国以降の近代史が詳しく巻末の略年表も重宝である。中国文であるが割に読み易く、古稀に近い著者の労を大いに認むべきである。(上海・商務印書館、一九五七・十一刊、A6判四二八頁、中幣一・二元、大安文化貿易扱)

◎ 第六〇回総会は四月十二、十三兩日にわたり全国各地から八〇名をこえる出席を得て、有意義に終ることができた。厚く御礼申上げる。総会運営中最も苦心したのは、東京医学史蹟めぐりで、前もつて二度下見して時間やコースを予定しておいたが、道路工事などの不意の故障で到るところ変更しなければならなかつた。それでもどうやら盛大にやれたのは天運だろう。解説の名調子は大いにうけたが、あとで調べたら汗顔の至りであつた。この時の解説プリントが十数部残っているから、希望者には先着順にお頒ちする（送料共三〇円）

◎ 「医学古典集」は既報の通り、少しおくれたが第三冊からは順調に出版できそうである。収載書目、解説方法などに御意見や御希望があつたらお聞かせ願いたい。

◎ 清水評議員と伊東理事の逝去はまことに惜しい。医史学会も近年長老格の先輩に相ついで世を去られ、まことに寂寞の感にたえない。謹んで物故会員の冥福を祈る。

◎ 「杉田玄白伝記史料解題」は第八巻の特集号百部を別装にして口絵やその後判明した追加史料を補い、上製本で九月に限定出版する。原色版三点、口絵十数頁の豪華版になる予定である。頒価五百円。早めに御予約を乞う。

◎ 次号に詳細を発表するが、来春東京で開かれる第十五回日本医学会総会には、本会はシンポジウムで参加する。従つて特に分科会を行わず、秋の地方会を充当する。また、史料展観と図録の作製も計画している。

◎ 本号発行は予定より少しおくれたが、久しぶりにもとの姿に戻り（七巻以降特集号続きであつたため）、多くのすぐれた論稿をのせることができた。

◎ 六三頁以降に充当した左開き横組の『室町末期以降海外交通史料解説』は、横浜開港百年記念として神奈川県立図書館で催された展覧史料の解説である。医学に直接関係はないが、東西文化交流史の面から実に貴重なもので、西洋医学の流伝を考える上に不可欠の史料であるから、とくに所蔵者である本会々員中村拓教授（横浜市大医学部教授）にお願ひして本誌を飾つていただきたい。この機会に篤志に厚く感謝する。

◎ 学会事務を円滑に運営する必要から、総会役員会の許可を得て、本会の連絡事務所を新設し事務を分担して迅速に処理することにした。新しい事務構成は次の通りである。

日本医史学会本部事務所（東京都板橋区大谷町七二四日本大
学医学部内山生理学教室内）会計全般・公用庶務

日本医史学会連絡事務所（横浜市中区長者町三丁目大場ビル四
〇一号室）編集・通信

日本医史学会関西支部（大阪市阿倍野区晴南通二ノ二一杏林温
故会）医譚編集

責任者は内山孝一（本部）石原明（連絡事務所）中野操（関
西支部）振替口座は本部・支部とも従前通り。

日本医史学雑誌（第九巻 第二号）

昭和三十三年七月 十日 印刷
昭和三十三年七月十五日 発行

編集者 石原明

発行所 日 本 医 史 学 会

印刷所 杉本紙器印刷株式会社

原 横濱市中区長者町三ノ三二
東京板橋 日大内山生理
横濱市南区白妙町二ノ七

日本医学会小誌

本会創弁在公元1892年，富士川游氏等首唱先人之遺業顯彰和医道の發揚，結成了「私立
獎進医会」為此本会的先驅・爾後發刊了「獎進医談」与「中外医事新報」兩週的報紙・在
1927年改称「日本医学会」・專弁編刊史的專誌在1941年4世董事藤浪剛一氏時，改称
「日本医学雜誌」・自1945年至1953年由戰後多雜事休刊了・1954年春復刊・現在刊出18
号・別在大阪関西支部，董事中野操氏刊出「医譚」此亦為本会機關誌・吾們請親愛的中華
医史專家諸先生，祖先宝貴的古代医学遺產交流探討，相俱工作世界人類幸福，特致敬礼・
郵寄宝貴意見和文籍交換，下記地址・

日本医学会 總 経 准：横浜市 中区 長者町 3 ~ 32 石原 明

日本医学会 関西支部：大阪市 阿倍野区 晴南通 2 ~ 21 中野 操

The Japanese Society of the Medical History

History : Founded in 1892, by Dr. Y. Fujikawa.

Purpose : To encourage the study on medical history, teaching as well as publication and research on medicine,

Publications : (1) "Journal of the Japanese Society of Medical History"
(Nihon Ishigaku Zasshi) 1941~1944 : 1954~to date. Q. B4, P. V. Free to members. Formerly : "Chugai Iji Shinpo" 1927~1940.

(2) "I tan" (Journal of the Kansai Branch of J. S. M. H) 1938~1943 :
1952~ to date. Q. B5. p. v

President : Koichi Uchiyama. (Nihon Univ. Med. School)

Secretaries : Akira Ishihara. (Yokohama Univ. Med. School)

President of the Kansai branch : Misao Nakano (Osaka)

Address of the office : C/O Department of physiology. Nihon University.
School of Medicine. Itabashi, Tokyo. Japan.

この雑誌の責任者 Castel 神父を論争の相手に選んだ。Castel 師は当時最も優れた物理学者、数学者、地理学者を兼ねた学士院会員であり、秀でた文筆の高僧でもあつた。

本書論は僅々30数頁に過ぎないが、当時全く不明であつた東亜の地形、特に日本と大陸との関係が明かにせられること恰も暗夜に黎明を迎えたかの感がある。この一文は地理学が近代科学に移ろうとする代表的見本である。伊能忠敬が日本の D'Anville なら、D'Anville は正に世界の伊能忠敬である。

- 14 Pieter Goos. 東亜海図. 1664, 1669年刊.

XI 近代航海の日本海域における業績並に海図の研究

- 1 James Cook: 第3次探検 (1776~1780). パリ, 1785年刊.
1779年2月13日 ハワイにて土人に殺さる.
- 2 La Pérouse. 航海記 パリ 1797年刊.
- 3 Krusenstern. 航海記 1803~6. 英語版. 1813年刊.
- 4 Sir Ed. Belcher: Samarang号 航海記 ロンドン1848年刊.
- 5 Gützlaff師: Lindsay 号航海記. ロンドン刊. 第3版.
- 6 林子平著「三国通覽図説」 江戸天明丙午 1786刊,
1792 子平禁錮せられ, 海国兵談を毀たる.
- 7 同上 Klaprosh 仏訳 パリ 1832年刊.
Irkutsk の日本語学校教師 Nikolai Kolochigin 事, 元伊勢白子の舟子新蔵の助けを借りて訳したもの.
本書の無人島(小笠原)の記事は近代欧米航海家に大いに注目せられた.
- 8 Hendrik Doeff: 日本回想録 ハーレム, 1833年刊.
- 9 Siebold著「日本」 ライデン, 1832~1852刊. 初版細川元侯爵蔵.
日本に関するあらゆる研究を集大成したるものにして, 刊行に21年を費した大著.
- 10 Dahlgren の「フランス人による太平洋航海」 スウェーデン1900年刊.
- 11 Teleki 伯 日本古地図 ブタペスト 1900年刊

XII 歐洲製版本地図

約100点に近い歐洲古版地図を陳列したが一々目録や解説を施さない。

XIII 参考絵画及び破究資料

海外の影響をうけた絵画(南蛮屏風・長崎絵・ガラス絵・泥絵など)及び研究資料も多陳列したが細目と解説は省略した。

の発見にあこがれたかを示す好話題を提供する。

IX スペイン大太平洋航海図

- 1 G. Anson: 世界周航記 (1740~1744) 原版は London, 1746年刊. 本書は仏訳, 1750年刊.
オーストリア王位相続戦争 (1740~1748) のため 英国はスペインと海上で争つた。提督 Anson はメキシコから来たスペイン船を待伏せハリツピン東岸で拿捕し、莫大な戦利品を掠奪したが、それよりも大きな収獲は Urdaneta が1565年に発見以来秘密にされていた大太平洋航海図であつた。
- 2 スペイン製太平洋航海図. スエーデン王立図書館蔵, Dahlgren氏複製. 着色。
- 3 La Pérouse が Monterey にて 1786年にスペイン船より入手せるもの。
- 4 Miguel Eloriaga, 1709年. セビリヤ印度古文書館蔵. 写真。
- 5 E, X Estorgo y Gallegos, 1770年 同上。
- 6 Pedro Devera 1626年 セビリヤ 同上 影写。
- 7 Hernando de los Rios Coronel, 1597年. 同上, 影写。

X 近代欧人の代表的日本地図

- 1 Martini師, “Japonia Reguum”, 1655年。
- 2 “Zee en Landt” [1650~1654] モンタヌスの著書を参照。
- 3 J. B. Tavernier: 紀行集. バリ, 1679年刊. 巻頭に日本図あり。
- 4 (Kämpfer)-Schenchzer, 1727年刊。
- 5 Reland 流宣図を訳したもの。
- 6 流宣図 蘭人歐洲将来, フランス国立図書館蔵, 模写。
- 7 Arrowsmith. 東亜図, 1801年刊。
- 8 増訂, 大日本国郡輿地路程全図。
長久保赤水作, 嘉永5年 (1852年) 刊, 仏国に渡つたもの。(L. dela Bédouière 旧蔵)。
- 9 D'Anville, 1749, 1751年刊。
- 10 D'Anville, 1749, 1751年刊。
- 11 Bellin の日本図 Charlevoix の日本史, バリ1736年刊。
巻頭に Bellin 作 日本図が D'Anville の図より正しいと主張したのが動機となり, D'Anville の公開状による有名な地理学上の論争が起つた。
- 11 Carlo Spinola (1564~1622) 伝 ローマ, 1628年刊。
彼は1612年11月8日の月蝕を長崎にて観測し、同時に Macaoにて Aleni及び Urman の2宣教師も之を観測し、初めて日本と亜細大陸との経度の差が15°と観測された。
- 12 D'Anville の Castel 神父に宛てた公開状 1737年刊。
フランスのインテリ雑誌 Tréveux 紙上で D'Anville の日本図が批難せられるや、彼は

1842年に von Siebold により発見された。またこの探検でわが伊豆諸島が実測された。この探検に当つた Tasman はタスマニアの発見で後年有名になつた。

- 5 無款。〔Isaac de Graaf〕無紀年(17世紀半ば) ヘーグ古文書館蔵。写真。
和蘭人の第2回目の金銀島探検は1643年に行われ、我が南方諸島、本州東岸、蝦夷南岸、南部千島(択捉、得撫)及び唐太南部が克明に実測せられ、これまで地理学上全く未知とされていた海域に一大光明を与えた。Maarten Grritszoon Vries, 1643の原図は失われたが、本図はその結果を現わす写本。

6 Janssonius, 1549年版。

Vriesの探検を現わす初期の版本の一つ。

- 7 Arnoldus Montanus: 幕府への和蘭答礼遣使紀行。蘭語版, アムステルダム, 1669年版。

8 同上。仏語版, アムステルダム, 1680年版。

- 9 Joan Blaeu 大型両球世界図。アムステルダム〔1648〕版。東京国立博物館蔵。
初版で完全なものは世界中でこの一点だけ、大英博物館及び瑞典古文書館には両球だけをくり抜いたものがある。宝永5年(1708)密航して日本に潜入した伴天連 G. B. Sidotti を鞫問のために新井白石の使用したもの。

10 同。新版。〔1678〕東京国立博物館蔵。

第2版〔1654~1660〕はロンドン王立地学協会、アムステルダム海事博物館、伯林王立図書館(戦後は不明)にあれど、この版はいまだ何処にも知られていない。和蘭製地図の最高の発達を暗示するもの。

11 新井白石書状 加賀藩の本草学者、稲生若水にあてた礼状。1軸。

12 延宝3年(1675)無人島乗前図 手稿図。

小原笠島(無人島)は文祿3年(1593)小笠原貞頼により発見されたと云われる。

本図は1675年幕府の名で行なわれた洋風の実測図である。林子平はこの島の海防を論じた。英米はこの島の所有権を争つたので、幕府は文久元年(1862)に、又政府は明治8年(1875)日本領なるを宣し、明治13年より東京府に所属せしめた。1951年米国の信託領となる。

なお参考として陳列した文久2年(1862)の測量図を参照のこと。

13 J. P. I. Du Bois: 歴代蘭領東印度総督伝。ヘーグ, 1763年刊。

14 和蘭艦隊と国姓爺との海戦図。故 Cordier 氏旧蔵。C. Imbault-Huart 復刻。パリ, 1893年刊。

15 Sanson: 亜細亜地図帖。1652年版。Terre de Iesso, Yezo ou Iesso.

16 Glantzby 紀行。パリ, 1729年刊。

日本と北米との間に温帯から寒帯にかけて大陸があると考えられた時期があつた。これが18世紀の地理学者間の活発な研究と議論の対象となつた。本書は和蘭東印度会社の医員 Glantzby が日本に来る航海中難破し、この大陸に着き、種々のローマンズの末、大陸の有力な王国の姫君と一緒にするという黄金と恋の物語である。巻頭にはこの大陸の地図まで掲げている。勿論本書は想像で書かれたものであるが、時人が如何に此陸地

9 Guérard de Dieppe, 1625年, 革製. パリ, 仏国海軍省蔵. 写真.

No. 5, 6, 7, 等の系統の最も早いのは Luiz 図であるが, Dourado の作品の数が多い所から, これらは凡て Dourado 型と呼ばれている. 17 世紀初頭に日本へ渡来せる欧人航海家——例えば William Adams, John Saris, Don Rodrigo, Sebastian Vizcaino 等は皆この型の海図を使用した.

VII 戦国図と南蛮図による編纂図

1 Luiz Teixeira, 1595年.

1595年 Orteluis が Luiz Teixeira から手稿図を得て, 彼の地図帳 “Theatrum Orbis Terrarum” 中に刊行したものである. 地図には 1595 の刊記がある. この図は若狭 (又あるものでは越中) と伊勢湾とを結んだ線以西に Dourado 型の日本図を用い, それ以東は我が戦国図を用いて組合せた編纂図である. この系統の図は ‘Theatrum’ の外, 当時の有名な大地図帳, 例えば Mercator Atlas, Mercator-Honduis Atlas, Jansson Atlas 等にも重刊され, 世に行われた分量は蓋し夥しいものがある.

2 原勝郎氏蔵, 京大記念館保管. 革製. 東亜航海図, 写真.

3 Antonio Sanchez. 1623年, 革製. 大英博物館蔵. 写真.

4 Nicolas Comberford, [1640年代], 革製 大英博物館蔵. 写真.

5 João Teixeira, 1649年, 革製. 仏国海軍省蔵. 写真.

Bartholomeo Lasso, 1590. の図と共に末期の南蛮海図の代表と目せられるもの.

6 John Damell, 1637年. 革製東亜航海図, フローレンス国立図書館蔵, 写真.

7 J. Kempthorne, [c. 1680] 革製東亜航海図, 大英博物館蔵, 写真.

VIII 和 蘭 海 図

1 西洋鍼路図 2 枚 1 組, 革製. 東京国立博物館蔵.

William Adams (三浦安針) 等が日本渡来の時 (1600) 使用したと推定されるもの. 日本の東半部及び朝鮮に乱暴に加筆している.

2 Hessel Gerritszoon, 1622 (1634. 加筆) 革製. 仏国海軍省蔵. 写真.

西洋鍼路図における落書様の加筆がこの図に克明に転写されている. この図の存在のお蔭で「西洋鍼路図」が三浦安針等の使つたものたることを立証する. この図の筆者は和蘭東印度会社の製図官であつた.

3 H. Hondius.

本州南岸の上記の型が版になつた 1 例.

4 Mathias Quast 及び Abel Tasman, 1639年. ヘーグ古文書館蔵. 写真.

日本の東方の海中にあると伝えられた金銀島を, 和蘭人は 2 度国家的な探検を行つた. その第 1 回探検の時の原図である.

この原図は 1640 年 1 月 8 日 蘭領東印度総督の Van Diemen から本国に送られ, 未刊の儘になつていたが, 何時しか民間に洩れ, 1880 年遂に競売になるに至つた. 危い所を Hendrik 親王の好意で買取られ, 国立古文書館の有に歸した. この探検の航海日誌は

- 2 東京国立博物館蔵, 「日本国航海図」 革製
- 3 三井文庫蔵, 「日本航海図」 革製
- 4 ポートラーノ日本図 秋岡氏蔵.
- 5 松平輝綱筆. 大河内正敏氏旧蔵. 「日本航海図」 写真.
- 6 保井春海作. 地球儀 元祿年間, 神宮司庁, 徴古館蔵, 模写.

VI 16世紀の代表的南蛮海図

- 1 ローマVallicelliana 図書館蔵, ポルトガル海図. 革, 無款, 無紀年〔1555~1543〕
写真.

1517年 Fernão Peres Andrade が 広東沿岸に来た時, Jorge Mascarenhas が琉球へ遠征しようと企てたことがあつた. 本図はその頃の伝聞による日本の知識を示すものであつて, 足未だ日本の土を踏んでいない時の海図. この型の日本図は有名な地図学者 G. Mercator により採用されたため, 版本として夥しく 17世紀末までも世に行われた.

- 2 Lopo Homem 1554年. ローマの Scipione Salviati 公爵旧蔵. 現在Firenze市の Museo degli Instrumenti Antichi 蔵. 革製. 写真.

日本は東亜の半島として描かれている. 半島日本の東の海中に群島日本あり, これは Marco Polo の考えの残骸. この型の手稿図で今日知られているのは約20種未満で, 一つも版になつたものはない.

- 3 Andreas Homem, 1559年. パリ国立図書館蔵. 模写.
- 4 Diego Homem, 1558年. ロンドン, 大英博物館蔵. 写真.

前者の息子の作. これにはもはや Marco Polo の影響はない. この系統の図を “Home-m” 型日本図というが, 日本の主軸を90度曲げ垂直にしたものである.

- 5 Ortelius

Ortelius 型の日本図は Batholomeu Velho, 1561 (Firenze の Museo Navale de la Specia 蔵) 及び Antonio Millo, 1582 (Roma, Bibl. Vittorio Emanuel 蔵及び大英博物館蔵) 図等により Homem 型の写しであることが証せられる. この型の日本図は有名な地図学者 Ortelius の地図帳 “Theatrum Orbis Terrarum”, Ant verpiaae, 1570 に採用されたので版本として夥しい数が世に行われ, Luiz Teixeira の1595年の日本図が現われるに至つて姿を消した.

- 6 Lazaro Luiz, 1563年. 革製, リスボン学士院蔵. 写真.

亀子型と云われる日本の形, 東北地方が東南に曲つているのが特徴. この系統に属するものが45点も知られており, 数点は版本になつている. 就中有名なのは Linschoten の水路誌 (1595~1596) 中の東亜図 (No. 8を参照) 中のものである.

- 7 Fernão Vaz Dourado, 1568年. 革製地図帖 Madrid市 Alba 公爵蔵. 写真.

現実的日本専図としては欧州製最古のもの (想像で描いたのは別として). 九州沿岸の島嶼を見ると室町時代の日本図を写した跡歴然たるものがあることは, 海東諸国紀との比較により読取られる. (IのNo. 5参照)

- 8 Linschotenの東亜図 1595年刊

これも対倭寇策の一書。

3 日本考略 (明の薛俊編)

原序は嘉靖癸未(1523)なれど、明版は亡佚して伝わらず、朝鮮にて重刻せられたもの一、二本邦に伝わる。本書は江戸時代の朝鮮版からの写本。

本書の「日本地理図」と Dourado 型の日本の地形との類似は著しい。

4 「粵東洋面地図」 無紀年、着色、卷子1軸。

パリ国立図書館蔵。影写本。682×30cm、林黙徳の印あり。明代の支那東岸(福建より広東まで)の海防図。

5 無題、無款、無紀年、卷子1軸。

パリ国立図書館蔵。影写本。地名には Amiot 師(錢徳明、1718~1793、在支1750~1793)の音訳註記あり。

6 中国描談 写本

山口の大内義興の遣明使宗設が大永5年(1525)に杭州にて写した南蛮の世界図があるが、これは偽作なることが証明される。本書は南葵文庫写本による。

V_(甲) 御朱印船航海図

- 1 池田宣政元候爵藏、革製海図 写真
- 2 絲屋隨右衛門使用、海図 鷹見 泉石 (1833) 影写 写真
- 3 岡本良知氏藏、写図
- 4 末吉孫左衛門使用、革製海図 写真
- 5 東洋諸国航海図 革製 東京国立博物館蔵。
- 6 角屋七郎兵衛使用、革製海図 神宮司庁、コロタイプ版。
- 7 稲葉新右衛門写 木版。
- 8 小加呂多 写図 東北大学蔵 写真。
- 9 盧元右衛門 (草拙) (1671—1729) 写図 影写。
- 10 無款寛文13年(1673)航海誌
- 11 Gaspar Moreira: 日支間の水路誌 パリ国立図書館蔵。写真。
中に1595年の航海あり。原本は日本紙に墨とペンにて書けるもの、「元和航海記」に甚だ近いものでポルトガル人の書いた実地に極東で用いた原本。
- 12 邦製アストロラブ (天文観測儀)
- 13 元和航海記 版本。
- 14 家康朱印状 慶長14年(1609)12月28日 セビリヤ印度古文書館蔵、写真。
- 15 秀忠朱印状 慶長15年(1610)5月4日 セビリヤ印度古文書館蔵、写真。

V_(乙) 南蛮流日本航海図

- 1 「ピロート之法加留多」 写図、東北大学蔵、写真。

紀元第1世紀のローマの地理学者の地理書。1518年、Venetia版。

2 Straboの地理書

紀元前後のギリシアの学者の地理書。活版発明時代の版本を欧州では *Incunabula* (嬰典) と呼び、東洋の宋版の如く珍重する。本書もその一つで、巻末には1494年1月28日の奥附がある。コロンブスがアメリカ発見の翌々年に当る。

3 Ptolemaeusの地理書

瑞西バーゼル、1525年版。

紀元2世紀の Alexandria のギリシャ系天文地理学者の地理書。活版発明以来数十種の版が行われた。本書はMunsterの編にかゝる。

III 世界発見時代

1 Antonio d'Herrera 探検史

仏訳、パリ1660年版。初版は1601~1615年版。

2 Diego de Couto 亜細亜遠征史

リスボン、1736年版。初版は1602~1645年版。

3 Battista Ramusio 探検航海紀集

ヴェニス、1588年版。

4 Martinez de la Puente 世界発見史提要

マドリット、1681年刊。

5 Marco Polo の遺言状

1383年筆。VeniceのBibl. Marciana 蔵 写真、原寸の約半分大。

6 Columbusの使用したと推定される海図

パリ国立図書館蔵。同館長 Ch. de la Roncière 氏の復刻限定版。コロタイプ及び解説。

7 Columbusの筆蹟

セビリヤのBibl. Capitular y Colombina 蔵。

彼が日夜手近において読んでいた Plinius の自然科学の本の中に書込めるもの。

8 南浦文集

南浦文之著(1610)、慶安2年(1649)版。南蛮人種子島漂着を記す本邦唯一の史料。

9 Mendez Pintoの紀行

スペイン語訳、マドリット、1620年版。

天文年間に種子島に漂着したと自称する南蛮人の1人と称するピントの紀行、本書は三権分立を説いたフランスの思想家モンテスキューの手沢本であり、彼の筆跡がある。

IV 明の倭寇対策書

1 籌海図編 (明の胡宗憲編) 1561

本書により倭寇は風を利用して来ることが分り、対倭寇策が樹立せられた。

2 武備三大秘書 (明の施永図編)

室町末
期以降

海外交通資料解説

—— 内外主要海図 ——

中 村 拓

I 官 撰 図

- 1 金沢文庫藏 日本図 無紀年〔1305と推定せらる〕手稿図
いわゆる行基図型日本図。
- 2 Gvido Gvaltieri 編 九州切支丹大名の天正羅馬遣使記
ヴェニス, 1586年刊。
この使節一行によりトスカナ大公に行基図型の日本図が献せられ、今なおフローレンスの国立古文書館に保存されている。またマドリットの国立歴史古文書館には、1587年平戸からヒリツピンへの使節の伝えた行基図も現存する。
- 3 「行基菩薩御作 日本地図」 嘉元3年(1305)の紀年あり、京都仁和寺蔵。
影写図。
- 4 「南膽部州大日本国正統図」 無記年手稿図。奈良唐招提寺蔵。影写図。
- 5 「海東諸国紀」 申叔舟奉勅撰、京城帝大複製本。
- 6 Antonio Francisco Cardim: Fascicvlvs e Japponicis Floribvs...Romae, 1646.
巻頭に日本図あり。“Japponiae Nova & Accurata descriptio”。
わが戦国時代の日本図が欧州へ伝えられた1例に属す。この系統の図は17世紀から18世紀にかけ、1世紀以上も世に行われた。
- 7 「日本之絵図」 無紀年〔1623—1626〕手稿図。上野図書館蔵。写真。
慶長度(1605)の国絵図に基いて作られた江戸幕府撰最初の総図。本図は江戸時代最初の総図というよりも、実測図である点からも本邦古地図中最も貴重なもの。
- 8 正保度、日本総図 手稿図 写真。
- 9 元録度、日本総図 手稿図 写真。
- 10 享保度、日本総図 手稿図 写真。
- 11 伊能忠敬作 日本総図 上野図書館蔵。
高橋景保がSieboldに贈り、Siebold事件(1828)に発覚押収されたものと考えられるもの。1827年手稿図。

II 歐洲地図学古典

- 1 Pomponius Melaの地理書

● 新発売

喘息

蕁麻疹

痒痒症

アレルギー性疾患に

新強力抗ヒスタミン剤

ヒベルナ

〔本質〕 塩酸プロメタジン

- 〔特長〕
- ①抗ヒスタミン作用は、塩酸ジフェンヒドラミンの30倍強力と云われている
 - ②中枢神経に対して著明な鎮静作用を有しこの為喘息の治療に特に効果的である
 - ③強力な副交感神経遮断作用を有する
- 以上の優れた特長によつて、本剤は諸種アレルギー性疾患に的確に奏効する。

適応症

喘息、喘息様気管支炎、蕁麻疹、痒痒症、湿疹、偏頭痛、アレルギー性鼻炎、接触性皮膚炎、過敏性紅斑、放射線痒疹、中毒疹、薬疹、動揺症、不眠症、強化麻酔、麻酔準備

〔包装〕 糖衣錠 (5mg) 30錠 100錠
 1000錠 (25mg) 100錠 1000錠
 注: (25mg) 1cc 10管

製 造

販 売

吉富製薬株式会社

武田薬品工業株式会社

大阪市東区道修町2丁目

(H-3)



NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History.

Vol. 9 No. 2.

July, 1958.

CONTENTS

Original articles

- On the founder of *Caspar school* in Dutch
Surgery at Edo era.....Ranzaburo Ohtori.....(31)
- History of the *Worm seeds* in Japan.....Fumihiko Satoh.....(35)
- On the "To~Hō" (vomiting therapie) for the treatment
of the psychosis in Edo era.....Terutane Yamada.....(38)

Literature

- Name list of the official doctor in the 9 year of
Genroku (1696)..... Akira Ishihara.....(48)
- Document of Nishikikoji family (Head Imperial official-
doctos in Japan) Vol. 3 Tasuku Yamazaki...(52)
- Exposition on the traffic overseas materials in 16~19
century at Japan.....Hiroshi Nakamura...(63)

Book review(59)

News (34)...(51)...(61)

The Japanese Society of Medical History.

(Department of Physiology, Nihon University, School of Medicine.)

Itabashi, Tokyo Japan.